

「読む」から「〇〇」へ

西日本図書館学会

大分県支部長 中島 誠

平成が改元されるまで後一年余りとなりました。思い起すと、社会人になる直前のあの正月に、終わらないと勝手に思っていた昭和が終わり、改元を目の当たりにしました。客観的に考えれば不思議ではない話ですが、まさか二度の改元を経験しようとは、どこか予想外です。

予想外と言え、あの改元の年は、WWWの概念が世に出た年でもあったのですが、今を想像できた人がいたでしょうか。現在進行中のメディアの変化は、おそらくは、巻物(Scroll)が冊子体(Codex)へ変わった時以来の大きさでしょう。オンライン(デジタル情報)とオフライン(冊子体)の関係についての議論は、すでに昭和の時代からありました。しかしながら、今、我々がいるのは、人間が“学ぶべき”スキルがメディアの変化とともにだんだんと変化し、それに伴って人間自体もだんだんと変化していく、そんな“グラデーションの端”に思えます(もうすこし内側に入っているかもしれません)。“学ぶべき”スキルの最も基本的なもの、「読み、書き、そろばん」、は人間が生来持つ能力としてDNAに組み込まれていないため、文明社会で生きていくために最低限学ばないといけないものでした。「読む」スキルは、「本を読む」スキルと同義であったと言えるでしょう。もっと言えば、「冊子体の本を読む」です。冊子体の本は、ページをめくる時の紙の手触りや匂い、文字のかすれや位置等々が、そこに記録された情報を取り出し、知識として記憶するための重要なヒントとなる、正に五感を使って知識を得るためのメディアです。冊子体がデジタル情報に置き換わったとき、読むスキルに替わって人間が学ばねばならない「〇〇する」スキルはどのようなものでしょう。解はまだ見つかっていません。

でも安心してください。冊子体がデジタル情報に置き換わるには、まだしばらく時間がかかります。人間の環境適応能力は高いですが、それ故に、子どものころ学んだスキルはそう簡単に忘れられません。多くの現代人にとっては、まだ、冊子体で読む方がデジタル情報を読むより効率的でしょう。また、現代のデジタルメディアが、いまだにどこかで人間の読むスキルを前提に作られているためでもあります。ところで、こんな時代の図書館は大変です。グラデーションの中で変化の前後にある両方の情報を扱わねばなりません。メディアは変わっても、旧時代の知識の延長上に新時代の知識が成り立つからです。

さて、昨年7月より支部長を仰せつかりながら、何事もまだ為せていません。せっかくの県支部ですから、できましたら、上記のような変化の時代に、図書館でできること、すべきことを、県下全域で実行できるようなプロジェクトを、会員の皆様と考えてみたいと思います。より一層のご協力を心よりお願い申し上げます。

2018年2月1日